
序

～初期研修3回も悪くない～

大学卒業後に、1年目の初期研修医（インターン）を3回経験するとは思ってもありませんでした。1回目は沖縄県立中部病院，2回目は在沖縄米国海軍病院，3回目は米国ハワイ大学の臨床研修です。

1回目の初期研修医時代，真っ先に思い出すのは卒後間もない5月初旬の研修医オリエンテーション。大変ななかでも，非常に“気楽”でした。というのも，どんなに忙しくても常に指導医や上級医に守られていたからです。“屋根瓦式”の研修であり，疑問があればすべて同僚や指導医に質問できる，素晴らしい環境でした。オリエンテーションの後，同期と居酒屋に行き，苦しい研修期間，睡眠時間もあまりないけれど，力を合わせてがんばろう！と気合を入れてお酒を飲みました。初期研修2年間を通して，平均4日に1度の当直は大変でしたが，そんな苦楽を共にした仲間に何度も助けられました。体力勝負で大変な面もありますが，今しかできないと，貪欲に吸収できたと思います。2年の初期研修終了間近，救急内科当直を終え，朝方5時頃だったでしょうか，外が明るくなってきたころきれいな鳥の鳴き声を初めて聞くことができたのを覚えています。恐らく普段から鳥は鳴いていたのですが，それに気が付く余裕ができるまで2年かかったということでしょう。上級医になった瞬間でもありました。この1回目の初期研修で，徳田安春先生がご担当の第2章-4，5，6で紹介した基本手技・手法はマスターできたと思います。

2回目の初期研修は，米国海軍病院です。日本にいながら米国で研修しているのと同じ環境で，英語でのプレゼン，コミュニケーションに慣れるのに時間がかかりました。第3章で紹介した症例プレゼンや医療者とのコ

コミュニケーションの重要性を学んだ期間でもありました。

最後の初期研修は米国での内科研修です。毎日多くの指導医とディスカッションし、岡田正人先生がご担当された第2章-1でご紹介するEBMの手法に則って患者さんの問題点を抽出し、必要な情報を集め、解決していく方法を学びました。

さらに岡田正人先生がご担当された第1章で研修医の心構えをお伝えしています。この心構えは、自然に身に付くというよりは、“どうせやるなら気持ちよく！”と意識して自主的に進めることが大事です。そうすればよりよい初期研修となることを、すべての研修を経験したうえで確信しています。

今回、臨床医、そして先輩として尊敬している徳田安春先生、岡田正人先生と“初期研修医の必読書”を執筆できたことは非常に光栄です。指導医になった今でも役立つエッセンスが満載で、初期研修医のときに読んでおけば、必ずや自らを救ってくれる一冊になったであろうと思わずにはいられません。

2014年1月

著者を代表して

岸本暢将

